

12月名画座企画 「チャールズ・チャップリン特集」

・作品概要

『街の灯』（1931年）

盲目の花売娘のために奮闘するチャーリー。無償の愛を笑いと涙で描く不朽の名作。

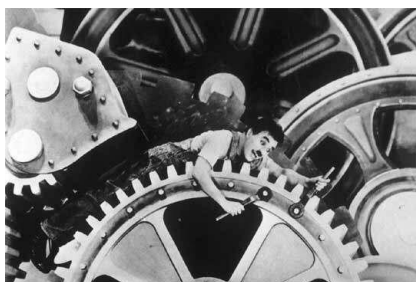


放浪紳士チャーリーは街頭で花を売る少女の美しさに魅せられ、ポケットに残る小銭で一輪の花を買う。だが少女は彼を金持ちだと勘違いしてしまう。後に引けなくなったチャーリーは、彼女の目の治療費を稼ぐため、悪戦苦闘を繰り返す……。

トーキーの時代を迎えた映画界で、チャップリンがサイレント映画に対する愛情と自信から、パントマイムとわずかな字幕だけを用いて、鋭い人間観察に裏打ちされた人間の残酷さと無償の愛を描き、世界中で大ヒットした名作である。完全主義者であるチャップリンは、本作の製作に3年の歳月をかけ、自ら音楽も担当した。抱腹絶倒のボクシング場面から、3枚のシンプルな字幕と抑制された演出で描かれる映画史上最も感動的なラストシーンまで、世界中の人々を今なお爆笑と涙で包み込む、チャップリン芸術のすべてがここにある。(引用元：Amazon)

『モダン・タイムス』（1936年）

人間性を疎外する機械文明を笑いで辛辣に批判した、チャップリン喜劇の美しき精華。



オートメーション化された工場で働くチャーリーは、非人間的な労働のために正気を失う。工場を放り出された彼はひよんなことからパンを盗んだ少女と知り合いになる。彼女は父を亡くした孤児だったのだ。チャーリーは少女との生活のために何とかして仕事をしようとするが……。

1936年当時にすでに機械文明の非人間性を予言し、それを笑いと哀愁で風刺した傑作喜劇。チャーリーが巨大な歯車に巻き込まれる場面、絶妙のパントマイム、ローラースケートの至芸、チャップリンが初めて歌声を聞かせた「ティティナ」、放浪紳士チャーリーと少女が手を取りあって歩き去るラストシーンなど、映画史上に残る爆笑と感動の名場面が続々と展開する。本作が出世作になったポーレット・ゴダードの輝くような美しさにも注目したい。(引用元：Amazon)

『独裁者』（1940年）

ヒトラーに真っ向から立ち向かった傑作。笑い風刺の命を賭けたプロテスト！



トメニア国の独裁者ヒンケルは、世界征服を目論み、人種の浄化を図るため、ユダヤ人をゲットーに押し込めて迫害をしていた。ところが突撃隊が押し入った床屋のユダヤ人はヒンケルと瓜二つであった。その偶然がとんでもない事態を招き寄せることになる……。

ヨーロッパで猛威を振るうファシズムの脅威をいち早く察知したチャップリンが、体を張った笑い風刺で抵抗した勇気ある傑作。チャップリンにとって初の本格的なオール・トーキー映画である。チャップリンは世界征服の野望に燃える独裁者と善良なユダヤ人床屋の二役を演じ、ヒトラーの狂気を笑い飛ばし、その欺瞞を告発する。これまでのスタイルとは一転したラスト6分間の大演説は、ファシズムの恐ろしさを糾弾し、全人類が平和のために団結する必要性を訴えて、映画史に残る名場面。当時、ドイツと同盟関係にあった日本では上映禁止となり、戦後15年経って公開されたが、その普遍的な主題が多くの人を感動させた。（引用元：Amazon）

『ライムライト』（1952年）

人生の美しさと哀しみを、残酷かつ美しくつづった、チャップリンの白鳥の歌。



落ちぶれた老芸人カルヴェロは、自殺未遂をはかったバレリーナを救う。彼女は足の病気で二度と踊れないと絶望していた。カルヴェロは彼女を励まし、勇気づける。そして自信を取り戻した彼女は再び舞台に立つ……。

チャップリンが生まれ故郷のロンドンに戻り、老境に入った自分自身の心境を吐露したセンチメンタリズムあふれる傑作。"Yes, life is wonderful, if you're not afraid of it. All it needs is courage, imation, and a little dough."「人生は恐れなければ、素晴らしいものなんだ。人生に必要なもの、それは勇気と想像力、そして少々のお金だ」というあまりにも有名なセリフにはじまる、チャップリンの人生観が反映された人生訓のような名ゼリフの数々、アカデミー賞オリジナル作曲賞を受賞した名曲「テリーのテーマ」の哀感に満ちた調べ、チャップリンと共にサイレント映画時代に喜劇王の異名をとったバスター・キートンと繰り広げる爆笑のボードヴィル芸¹など、チャップリンの映画人生の集大成ともいえるべき作品である。（引用元：Amazon）

¹アメリカにおいての舞台での踊り、歌、手品、漫才などのショー・ビジネスのことです。

・解説

「チャールズ・チャップリン」(1889年～1977年)

バスター・キートンやハロルド・ロイドと共に、世界三大喜劇王と呼ばれています。1930年代、1940年代のハリウッド黄金期を支えた監督の一人です。チャップリンの最もよく知られている役柄は、小さな放浪者(リトルランプ)です。窮屈な上着に、だぶだぶのズボンと大き過ぎる靴(ドタ靴)、山高帽にステッキといった格好のちょび髭の人物で、アヒルのように足を大きく広げてガニ股で歩くのが特徴です。ホームレスですが紳士としての品格を保ち、権力を振りかざす者を笑い飛ばします。この役柄でチャップリンは、弱者の立場から資本主義の不平等への怒りを表しています。チャップリンは笑いに涙をまじえつつ、人間の尊厳をうったえ続けたのです。チャップリンの作品を特徴づけるものとして、パントマイムがあります。チャップリンは「彫刻に着色するようなものだ」と言ってトーキー映画に反対していました。観客の想像力を尊重し、豊かな言葉を観客自身が創造できるように配慮していたのです。チャップリンは1952年にアメリカから追放されますが、その原因の一つは、今回の企画でも取り上げる『独裁者』だとされています。当時のナチス・ドイツはアメリカにおいて、反共産主義の国であるとして肯定的に評価されていました。そのドイツを批判するのは危険なことだったのです。当時は赤狩りの時代でした。赤狩りを行っていた非米活動委員会は、共産党のメンバーがハリウッドの脚本家組合を支配し、映画の内容を共産主義者に都合の良いように変えていると強引に証明しようとしていました。映画という物語を語る上では、脚本家の思想が重要となるので、特に脚本家は目を付けられていたのです。喚問された映画人達は、密告することを強要されました。助かりたければ他人を売るしかありません。これによりチャップリン以外にも、多くの映画人達が職を奪われました。共産主義と関係があるとされ、職を奪われた脚本家達の中でも、代表的な脚本家達はハリウッド・テンと呼ばれます。ハリウッド・テンの中には、のちに偽名で『ローマの休日』の脚本を書くダルトン・トランボも含まれています。チャップリンはアメリカを追放された後、赤狩りを風刺する映画として、『ニューヨークの王様』をイギリスで撮っています。今回は取り上げられなかったのですが、チャップリンの作品には他にも多くの名画があります。映画史上初めて喜劇と悲劇の融合をはかった『キッド』。600人のホームレスを集め、大規模なロケーションを行い、「チャップリン史上最も力が入った作品」とされる『黄金狂時代』。綱渡りのシーンをスタントなしで演じ、アカデミー名誉賞を受賞した『サーカス』。「私の映画の中では最も反抗的な映画だ」と述べ、赤狩り、アメリカの商業主義、ジャズ、映画などに対する皮肉が随所に籠められた『ニューヨークの王様』などがあります。興味のある方は是非観てみて下さい。アメリカから追放された20年後の1972年、第44回アカデミー賞で、チャップリンを守り切れなかったアメリカ映画界から謝罪として、「映画を20世紀の芸術たらしめたチャップリンへの計り知れない功績」に対して、2度目の特別名誉賞を受賞しました。この授賞式では、5分以上スタンディングオベーションが続くという他に類を見ない祝福を受け取り、『モダン・タイ

ムス』の「スマイル」がゲスト全員で歌われました。

『街の灯』（1931年）

トーキー映画の時代にあえてサイレントで撮られた映画です。この映画は、「平和と繁栄の記念碑」でのシーンから幕を開けます。着飾った人々が集まって、記念碑の除幕を待っています。幕を開くと、大理石の女性の像の上に寝ているチャーリーの姿があります。「平和と繁栄の記念碑」が、が寝る場所のない放浪者の寝る場所になっています。1929年から1933年までは、世界大恐慌の時代でした。働きたくても仕事のない時代だったので、ここには、「平和と繁栄」の幕を開いてみると、内情はボロボロなのだという皮肉が籠められています。笑いを取りながら放浪者である主人公の状況を説明する無駄の無い構成となっています。酒に酔って自殺しようとする金持ちを、「明日が来れば鳥も歌います。勇気を出して現実を直視しなさい」と言ってチャーリーが引き止めるシーンがあります。このセリフを放浪者に言わせる点に皮肉が籠められています。この金持ちはチャーリーに感謝します。酒に酔っている間はチャーリーを思い出すが、酔いから覚めるとチャーリーを忘れてしまいます。ここでは金持ちの二面性が描かれています。金持ちの二面性が無いチャーリーは、金持ちからお金を貰っても、貧しい人のために使ってしまう。貧しい人がお金を持った方が良い使い方が出来るのです。ここには、冒頭のシーンと合わせて、金持ちは貧しい人を助けようとはせず、貧しい人が助け合うしかないのだというメッセージが籠められています。この映画は普通に観ても楽しめる恋愛コメディ映画なのですが、随所に社会に対する皮肉が籠められていることを知って観てみると、違った楽しみ方が出来るかもしれません。

『モダン・タイムス』（1936年）

チャップリンはこの映画の、インチキ外国語でティティナを歌うシーンで、初めてスクリーンで肉声を発しました。ラストシーンの印象的な「スマイル」は、チャップリン自身が作曲したものです。「人間の機械化に反対して、個人の幸福を求める物語」という冒頭のテロップに、この映画のテーマが凝縮されています。大きなモニターで労働状況を監視され、トイレで煙草の一本をする姿でさえも監視されます。労働者たちに効率よく食事を採らせるために、自動食事摂取マシンが導入されます。とうもろこしが暴走して回転し、ナットさえも食べさせられます。食事という、人間の基本的な欲求さえも満足させられず、心の豊かさを失っていくのです。チャップリンがベルトコンベアーで流されていくというシーンが有名です。ここには、ベルトコンベアーの上の部品を処理しているうちに、ベルトコンベアーの上で、人間自身に、人間の機械化の処理が施されていくという皮肉が籠められています。「要するにですよ、機械というものが、世のため、人のためということで使われさえすれば、これは人間を奴隷の状態から解放し、労働時間を短縮し、それによって、知性の向上、生活のよろこびというものを増進するのに役立つことは決まっているのです

からね」とチャップリンは語っています。チャップリンは、機械に対してではなく、素晴らしい発明をすぐに欲望のために悪用する人間に対して憤っているのです。あくまでこの作品に籠められているものは、人間が機械化される社会に対する問題提起なのです。

『独裁者』（1940年）（事前情報があった方が良く判断し、ネタバレを含んでいます）チャップリンの映画の中で最大のヒット作です。ユダヤ人の床屋と独裁者のヒンケルが瓜二つである点には、独裁者もユダヤ人も皆同じ人間なのだというメッセージが籠められています。チャップリンとヒトラーにはいくつかの共通点があります。チャップリンが1889年4月16日生まれなのに対し、ヒトラーは1889年4月20日生まれで、4日違いの同い年なのです。二人とも小太り、低身長、トレードマークがちょび髭です。一説には、ヒトラーのちょび髭は、自分の知名度を上げるためにチャップリンをまねたものだとされています。この映画では随所でヒトラーが風刺されています。ヒンケルの一日の公務は、ただ官邸を落ち着きなく動き回るだけです。その時間が空いた3秒ほどを利用して、自分の絵と彫刻を作らせ、秘書を口説き、目を輝かせながら子供じみた実験を見学します。ここではヒトラーの幼児性が表現されています。ヒンケルが優雅な動きで地球儀をもてあそぶ美しいシーンが有名です。世界征服を目指した独裁者の孤独と、赤ん坊のような無邪気さが表現されています。世界を愛し、抱きしめると地球儀は割れてしまいます。ここには、独裁者に悪意はなくても、世界には合わないのだという皮肉が籠められています。1930年代のヒトラーは「演劇界のスター」でもありました。そのスター性にチャップリンが着目し、「いつか私も独裁者という役柄を演じてみたい」と望んだことが、この映画の出発点となりました。当初は喜劇的なエンディングが用意されていたのですが、この映画は激変する世界情勢と並行して製作されたのです。暴走するナチスへの怒りを表現するために、真剣そのものの6分間の演説に差し替えられました。この映画はチャップリンの初めての長編トーキー映画ですが、ラスト6分間の演説を音声で伝えるためにトーキーが採用されました。当時のチャップリンは、ホロコーストの存在を知らませんでした。のちに、「アウシュビッツの真実を知っていたら、この作品を作らなかっただろう」とチャップリンは語っています。中盤でチャップリンは、独裁者としての差別的で攻撃的な演説をします。チャップリンは、力んで仰々しくしゃべるヒトラーの演説をさらに誇張した演技をしています。演説の途中でヒンケルが手を挙げると、歓声を上げていた群衆が急に静かになります。これは当時のナチス・ドイツの画一的な状況を風刺しています。独裁者としての演説に対してラスト6分間の演説では、優しく語りかけるように、自由を求める思いを素直に伝えています。ラスト6分間の演説は、カメラに向かって語りかけています。カメラ視線は、通常の映画ではタブーとされています。この手法をあえて用いることで、物語世界と現実世界が曖昧に重なるのです。つまり観客は、映画の中での演説の、二重の聞き手となっているのです。これにより観客へのメッセージ性を高めています。演説の中で You という言葉を多用していることから、観客に伝えたいというチャップリンの思いが読み

とれます。これまでの映画の中で、どれだけ悲惨な目に遭っても笑い飛ばしてきたチャップリンが本気で憤っているのです。世界で最も愛された喜劇王が、世界で最も憎まれた独裁者に、たった一人で立ち向かった作品なのです。

『ライムライト』（1952年）

チャップリンの自伝的作品です。チャップリンが長編映画で初めて素顔を出した作品です。アメリカでの最後の作品となりました。チャップリンとキートンという世界三大喜劇王の豪華な共演が見どころです。アカデミー作曲賞を受賞しました。誰からも相手にされないまま落ちこぼれ、年老いたコメディアンが、バレリーナに生きる希望を与え、生きて闘うことを強く説くのです。チャップリンが、喜怒哀楽に満ちた人生から掴み取った教訓や人生観が随所に描かれています。映画の構成が秀逸です。この映画の構成は、前のシーンが原因となり、次のシーンの結果へと繋がり、その結果が原因となって次のシーンへと続いて行くという繰り返しです。シーンとシーンの合理的な積み重ねでストーリーが進行して行くという、教科書に載せて良いほど綺麗に整理された構成となっています。この映画はコメディなのですが、チャップリンの他の映画とは笑いの取り方が異なっています。例を挙げていきます。チャップリンはオレンジをかじるのですが、その果汁が自分のお気に入りの服に飛び散ってしまいます。チャップリンは寝ている少女の枕元にあるタオルを取ろうとするのですが、少女がチャップリンの酒の匂いにむせて咳き込んでしまったので、口臭を消すために慌ててうがいをします。チャップリンはニシンを触ったことで、手が生臭くなってタオルで手を拭くのですが、次はそのタオルが生臭くなってしまいます。チャップリンが酒をこそこそと飲んでいると、誰かがドアを突然ノックして、それに驚いた拍子に酒が気管に入ってしまいます。これらの例のような、かつては見られなかった、深い味わいのある生活ギャグがこの映画の特徴です。年老いたコメディアンが霧を醸し出すために、かつての動きで笑いを取るエネルギッシュな社会風刺とは対照的な、経験を感じさせる洗練された気品のある笑いの取り方を目指したのかもしれませんが。